越後より

相馬御風

○

越後の九月、その末ばから末へかけて、しと〳〵と大地の底まで沁みとほるやうな雨が降りつづく。丁度早稲を刈る頃のこの雨には、農村の人々は全く困りぬいてゐる。

それは五月雨のやうなしめ〳〵したいやな感じばかりでなく、全く文字通りに地の底まで沁みとほらねばやまぬといったやうな降り方の雨である。夜なかに目覚めて静にこの雨の音を聞いてゐると、「のたれか自分ひとりだけが何もよい事も世界の中に、ぽつんと一人置かれてゐるやうな、やるせない孤獨を感じさせられる。

（淋）

（淋しさ）、さうした孤獨の中にあって、私はなほにその全宇宙を沁みつ〳〵してゐるやうな雨の音の底に、かすかにほろ〳〵の声を聴く事がある。それはもう（この世の）

なるほどかもしれない。

続いてゐるのを聴く

鳴き騒ぐた声である。四声、五こえと続けて
なくことの出来ないほどに立てた声である。
しかし、それでもそれはそのあすれないさ
もの〻声に、たまらなさを覚える。
最後の息迫でも鳴きつけるべく生れた其の
小さい一いきものの、運命が、私には比上なく
いとしいものに思はれる。持って生れた手紙
のまゝに、最後の息をしぼりとるようにして、陽を
陽て〻鳴き交し、ゆびをなす其の虫の性が、
さうした場合今更のやうにしみ〻と私の心
を思くのである。

○

つひこのあひだ、私は人々と共に、海坂二
千五百尺もある坂のとある山に登った。
さすがに、山はもう冬が深んでゐた。登る時
には苦しさのあまりさほど目にもつかなか
つたが、下り道では私達はいたるところに花
をそなへもたり、夢よりも美しい色の木や草
に目をとめ、美しい色のた。

御風用箋

それらの木や草みづからは、人間の目かそれを見やうが見ようが、そんなことにはおかまいなく、実をそなへたかせ、実をそなへんでゐるのであらうが、それでも私達はその場合に初めてうしろ美しいと思ふ。花やいかせたり実をそなへたりしてゐる木や草のを、いたづらに見過すことはけっしてないやうに感じ、出来るだけ多くを、出来るだけ心をとめて見てやりたくあつた。しかし、それからとりつて、それらの花や実を持つた木や草を無闇と折つて帰つてきても再び生きはよらなかつた。（とりふえには）

しかし、山を下つてから振り返つて仰ぎ見た時、私達には全体としての雄大な山の姿の美にうたれるばかりでなく、そっと親しみのある美しさが伴せ感じられた。（そこにはそれは）そこに死ぬ、そして二たびと私達の目に触れることのないうところの木や草に対する愛着あればこそであつた。（九月三十九日）

御風用箋